Child
子どもを守る
Saving

5 佐々木貴さんと
高原龍二さん、
油布佐和子さん、
香山リカさんの座談会
「教員の働きがい」前編

子どもたちの笑顔のために先生をもっと元気にしよう！

「子どもを守る」シリーズ 5 「教員の働きがい」前編

今年9月、（社）国際経済労働研究所（大阪市）が行った調査分析で、教員の感じる「働きがい」が、一般企業の従業員と比べて極めて高いことが明らかになった。一方で、増え続けている教育職員の病気休職者数。中でも一番多いのは精神疾患によるものだ。一見矛盾して見える二つの調査結果の背景にはどのような事情があるのか。

「子どもを守る」シリーズ第５弾は、「教員の働きがい」と題して、職場という視点から教育現場を語ってもらった。

――「教員の働きがい」についての全国的な調査分析はははじめてですね。

高原　今回の調査は、私どもの研究所が20年前から続けている一般企業の労働組合員の意識調査がベースになっています。参加労組数は１９０、参加人数は１４０万人に及びますので、おおよそ日本全国の一般的な労働者の意識が測れているのではないかと思います。今回、全国の教員の方に、同内容の設問に回答いただいたことで比較が可能となりました。

極めて高い教員の働く意欲

佐々木　教員の働く意欲が一般企業の方と比べてどうなのか。私たち教員も知りたい内容でした。

私は岩手県の教員なのですが、東日本大震災で教職員にかかった負荷を分析する中で、被災地以外にも共通する問題を感じていました。そんな中、貴重な調査結果が出たと思います。

高原　データを見た時に教員のみなさんが本当に熱意と意欲をもって仕事にとりくまれていることに驚きました。具体的には、「仕事が楽しい」、「仕事に生きがいを感じる」などの項目が一般企業に比べ、極めて高いということが明らかになりました。（グラフ1）

しかし、「働きがい」が年齢とともに下がることも確認されました。一般企業の従業員は、年齢が上がるほどに「働きがい」が高まる傾向があります。ところが、教員、とくに男性は、年齢が上がるほど、急激に下がるという非常に特徴的な傾向が出ています。（グラフ2）

佐々木　調査結果で数値が低くでている世代ですが（笑）。意欲が落ちているという実感はありません。ただ、教員は、かなりの体力を必要としますから、20代と同じような体力的負荷がかかる時は、正直きつい場面もありますね。

そもそも教員をめざす人は、自分自身が恩師の影響を受けたなどの体験があって、「私も子どもの成長に関わりたい」という想いがあるわけです。だから、自分たちが少々の無理をしても、そこに子どもの成長が見えれば、苦労を忘れるようなところがあります。

佐々木貴
（ささき・たかし）
教員として、岩手県の中学校で約20年勤務。岩手県教職員組合九戸支部長等を経て、2010年度から日本教職員組合中央執行委員。

熱意に支えられた教員の「働きがい」

佐々木　ところが、ここ10年ほどの実感ですが、持ち込まれる調査・報告書づくりなどの作業は増えるばかり。社会は多様化し、家庭の方針もさまざまになってきています。情報開示を求められる一方で、個人情報や肖像権などには細心の注意を払わなければならない。こうした作業に追われ、教員が最も大切にしている「子どもたちと向き合う時間」をどんどん削られていると

高原龍二
（たかはら・りゅうじ）
大阪大学大学院人間科学研究科修士課程修了後、2002年より国際経済労働研究所にて労働者を対象とした調査研究業務に従事。

いうことが、精神的にこたえているというのが本音のところだと思います。

高原　データからもそのような傾向が読みとれます。内発的働きがいを表す「仕事の楽しさ」は一般企業の方に比べて非常に高く、外発的働きがいに関係する「休暇や労働時間」には満足していない、というかなり偏った「働きがい」の性質を持っています。わかりやすく言えば、教員の方の「働きがい」は、熱意に支えられているということです。

また、「児童・生徒にとって必要とされている」ということが、やる気につながることも示されました。

「教員の多忙化」の実態は、すでに行政調査などで明らかになっていますが、今回の調査でも教員の方の1カ月の超過勤務時間は平均約50時間で、一般の方の2倍以上になっています。

油布　私たちも同様の調査を行っていますので、教員には熱意があるという点は分かります。ただ、現在の「教員の多忙化」の実態は「量」だけでは語れないと思います。

私たちは実際に先生方に一日付き添って、記録をとっていく「エスノグラフィー」という調査を行っていますが、その結果をみると、教員の仕事は、一定時間内の活動密度が非常に濃い状態なのです。それは「お母さんの仕事」に例えるとわかりやすいでしょう。

洗濯機を回しながら、掃除をして、赤ちゃんの泣き声に気をつけながら、「今日の夕飯は何にしようかな」と考える。つまり、授業だけでなく多様な活動を同時並行的に考え、行う状態がずっと続いているのです。このことは教員の「過重労働」の実態を知る上で重要なポイントだと思います。

香山　「マルチタスク」の状態ですね。マルチに仕事をこなすには、マネジメントの視点、つまり「今、どのタスクがどう動いているか」を見る上位の自分が必要です。

ところが、学校の先生の場合、目の前で泣きだした子がいる、教室には計算ドリルを解いている子が待っている、職員室には突然、保護者からの電話がかかってくる――。そんな中で、「上位の自分を持って」といっても難しいですよね。できても、それでは子どもに響く言葉もかけられない。

私たち医者もそうですが、目の前の「人」に没頭しないと、相手にどういう関わり方をしているのかが伝わってしまいます。だから、パソコン上でいろいろなウィンドウを開いて同時に作業するようにはいかないのです。

質・量ともに「過重労働」の実態

高原　「質」に関していえば、「自分の能力と比べて今の仕事はどのくらいか」という設問に対して、能力を超えているという人は一般で30％、教員だと40％です。仕事の質・量の両面で負荷が高いということは調査からも見て取れます。

佐々木　「過重労働」との関連で言うと、教員の精神疾患者数は、91年から17年連続で増えていて、病気休職者のうち63％が精神疾患であるという結果がでています。（グラフ3）

年間５４００人の教員が精神疾患で休んでいるという状況なのです。

高原　今回の調査で、理想と現実とのギャップを感じている教員が多い都道府県ほど、教員の精神疾患休職率が高いという関連が示されています。つまり、都道府県によっては精神疾患につながりやすい状況にあることが、意識データに表れているのではないかと考えます。

油布　今回の調査結果を単なる数値として片づけるのではなく、もともと熱意のある教員を今後どう支援していけばよいかという前向きな提言につなげることが大切ですね。

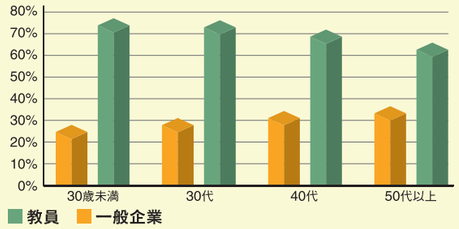
――それでは、もう少し具体的に見ていきましょう。【後編は12月26日号（12月19日発売）に掲載予定です】

香山リカ
（かやま・りか）
東京医科大学卒業後、神戸芸術工科大学助教授等を経て、現在は精神科医、立教大学現代心理学部映像身体学科教授。執筆活動も精力的に行う。

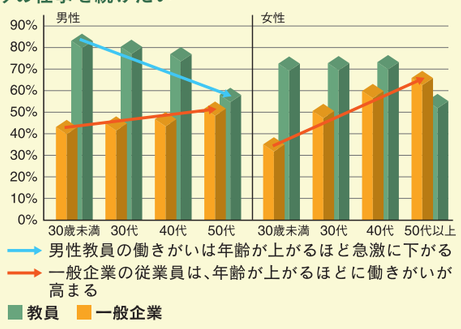
司会・構成
「子ども応援便り」編集長　高比良美穂

油布佐和子
（ゆふ・さわこ）
東京大学大学院教育学研究科修士課程修了後、福岡教育大学を経て、2008年より早稲田大学教育・総合科学学術院教授。

グラフ1
今の仕事にとても生きがいを感じる

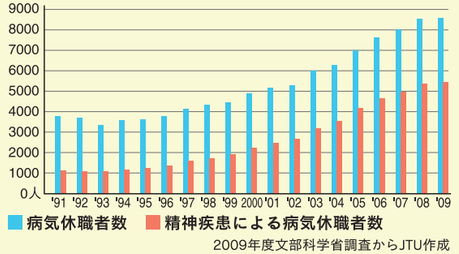


グラフ2
今の仕事を続けたい



［調査概要］
●調査時期：2010年11月～2011年1月
●対象者：日教組組合員の内、小・中・高・特別支援学校の教員12376名
（回収数8320、回収率67.2％）

グラフ3
教育職員の病気休職者数と精神疾患による病気休職者数



2009年度文部科学省調査からJTU作成

【注記】**外発的働きがい**：外的な要請（例えば、報酬や罰など）によって生じるやる気。
内発的働きがい：外的な要請がなくても、内から沸きおこる行動へのやる気。